2、砂遊び
3、土と遊ぶ（理科との合科）
4、土粘土で遊ぼう
・粘土で好きなものを作ろう
・トンネルの顔
・粘土の連想ゲーム
・乗ってみたい乗り物
5、おいしそうな秋の野菜や果物
6、一番自分らしい顔

(二)授業実践のようす

一番自分らしい顔（四時間）

○本時の目標

表情のある自分の顔を、基礎的な技法を使って粘土で立体的に作ることができる。

図1　一番自分らしい顔

（スケッチと短文）

○指導の過程（資料2参照）

七、研究の結果と考察

(一)　絵日記の指導を一年の時から毎日継続してきたので、日常生活の中から自分が表現したいものや出来事を切り取って描写できるようになった。

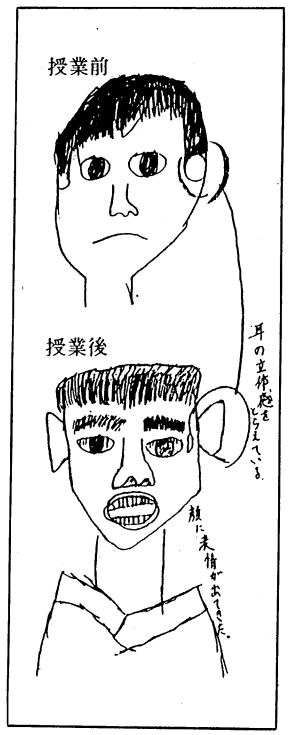
(二)　理科との合科や創意の時間を効果的に利用して指導したので、体全体で土や粘土に取り組むことができた。

(三)　粘土、彫塑の基礎・基本となる技法を明らかにし、学年の発達段階に応じた系統表を実験的に作成した（資料1参照）。図工科本来の目標である豊かな創造性を育むことを大前提としながらも図工科で教えるべきこと、発見させ育てることもある程度明確にすべきである。

(四)　実態調査、話し合い活動、アイデアスケッチ、短作文などにより表現の意図、願いをしっかり持たせてから表現させたので子どもたちの願い（主題）がはっきりした作品ができた（冒頭の写真参照）。これは、立体・彫塑の特性である心象性を育てることにつながった。

図2　表現力の推移

自分の顔（イメージによる描写）



八、研究のまとめと今後の課題

十の題材で研究の目標に迫るために実践を積み重ねてきた。その中で具体的な技術や技法の基礎・基本を明らかにするために一つの試案を作った。発達段階に応じた技術・技法の系統表は、抽象的なものではなく、すぐに授業に生かせるものである。技術や技法を教え込むのではなく、発見させ、育てるという観点で指導過程を作って指導した結果、どの子も以前より表現力が高まってきた。しかし、この系統表もまだまだ理論研究の必要があるし、指導過程の中で十分に生かしているとは言えない。実践を重ね、より適切なものにしていきたい。

資料2　指　導　過　程

段階	学習活動内容	時間	教師の働きかけ	予想される児童の反応	指導上の留意点(評価)
感受	1.粘土遊びをする。	10	1.粘土遊びをしてみよう。	○おもしろそう。だんごやおにぎりを作ろう。	○丸める、延ばす、ちぎる、くっつける等粘土の性質を生かして手や指を充分動かす。
	○本時のめあてをつかむ。		2.1番自分らしい顔を作ろう。	○笑っている顔 ○怒っている顔 ○泣いるいる顔	○自分が作りたい表情の顔の形や特徴をスケッチ等(図1・2参照)を参考にして決める。 めあてがしっかりつかめたか(観察)
構想	2.製作の方法を知る	5	3.どんな方法と手順で作っていこうか。 (1) 鏡を見て百面相をしよう。 (2) 大きなかたまりを作ろう。 (3) 鼻から作っていこう。	○おむすびの形にする。 ○正面を捜す ○鼻目口を作る。	○頭のおおまかな形をとらえさせる。 ○鼻から先に作らせると鼻と顔の中の部分のバランスがとりやすい。 ○ひねり出しは親指と人指し指でゆっくり回りから粘土を寄せる。 イメージを高め、製作手順をつかんだか。(観察)
表現	3.自分の顔を作る。	60	4.大きなかたまりから顔を作ろう。 ○自分の粘土を全部使って作ろう。 ○グループ毎のめあて Aグループ……顔の立体的な構造を確かめながら表情豊かに作る。 Bグループ……目、鼻、眉、口などを凹凸で造る。 Cグループ……顔の中の鼻を高くとらえて作る。	○笑った顔にしよう。 ○怒った顔にしよう。	○かたまりのどこを正面にするか決め、初めはおおまかに作らせる。 ○粘土が乾燥したり堅くなったりしたら、濡れた布で手を濡らしながら作らせる。 ○粘土以外のものも必要に応じて使用させたり、発見を認めたりする。 自他の作品を見てその良さを見付けることができたか。(発表、観察、カード)
鑑賞	4.作品の鑑賞と学習のまとめ	15	5.お互いの作品を見せ合い、表情の違いやおもしろさなどを見たり話し合ったりする。		